

आयुस्、あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市横島町千足80

*** 貸出カードの思い出 ***

京都文教大学図書館長・総合社会学部・教授(社会学、大衆文化論) 鶴飼正樹

少し前まで、図書館の本には「貸出カード」がつきものだった。ある世代まではあたりまえのことだが、今の学生さんは知らないだろうから説明しておく、貸出カードとは、はがきより少し小さいサイズのカードで、本を借りた人の名前、借りた日と返した日が記入する欄があり、本の裏表紙の内側(裏見返し)に貼りつけられた紙のポケットの中に入っていた。図書館の棚から取り出した本は、まず目次に目を通し、本文をパラパラとめくり、奥付の刊行年をチェックして、最後に貸出カードを見る。そういう手順が、習慣みたいになっていた。

貸出カードには、本を借りた人は「借り手」ではなく「帯出者」と書かれていた。この「帯出」という言葉に、小学生のころは、どこか大人のおいを感じたものだ。本を借りれば自動的に、だれでも帯出者になるわけだけれど。

この貸出カードを見るのが、私のひそかな楽しみだった。私が手に取る本は、ベストセラーだったり古典だったりすることはめったになく、閉架書庫の棚の中でひっそりと埃をかぶっているような本ばかり。回転率は当然よくないから、貸出カードに記入されている借り手の名前も多くない。ここ10年ほどだれも借りていない本も、少なくなかった。そして、「40.11.13」(昭和40年11月13日)などという日付を見ると、ああ、私が小学校1年生のときにこの本を読んでいた人がいたのか……、と、歴史にひたりつつ、借りようか、借りまいか、しばらく思索するのである。

以前の借り手の中に、研究室の先輩の名前を発見することもあった。ああ、あの人もこれを借りて読んだのかとか、なんだ、えらそうなことをいっていても、ちょっと前まではこの程度だったのかとか、感じることはさまざまである。それが、

すでに広く一般にも知られる本を数多く書いている、えらい先生の名前だったりすると、恐縮しつつも、うれしかったりするのだった。

中には、私が生まれるはるか前に出版され、購入されてからずいぶんたつのに、私が初めて借りることになったという本もあった。そうした本は、ページを開くだけで、背表紙の糊がパリッと音をたてて割れたりすることもあるのだが、「おお、何百万冊もある図書館の本の中のこの1冊は、何十年もの間、何万人も在籍した学生のどれひとり読むことはなかったが、今、私が読もうとしているのだ」などと、まるでツタンカーメンの墓に初めて足を踏み入れたハワード・カーターのような、大げさな感慨をいただいたものである。

本は大量生産品だ。だから、この世の中にはまったく同じ日に生まれた、同じ内容の本が、数多く存在する。けれども、その1冊1冊には、それぞれの歴史がある。自分で買った新刊に刻まれるのは、著者とその本と自分との歴史だけだが、図書館の本には、図書館そのもの、それに請求記号をふった人、それを配架した人、タイトルをながめただけの人、手に取った人、借りて読んだ人など、数え切れないほどの人とその本との歴史がまとわりついている。だから、図書館の本には、自分で買った本にはない、出会いの厚みがある。

図書館の本がコンピュータで管理され、個人情報保護もうるさくなった今日では、貸出カードのような出会いはありえないかもしれない。それに、1996年にできた京都文教大学図書館の本には、最初から貸出カードはなかった。蔵書数もけっして多くない。

それでも、京都文教大学図書館のどこかでひっそりと、今も出会いを待っている本がいるはずだ。

(うかい まさき)

「本の読み方」

短期大学副学長・食物栄養学科・教授 (体育学・トレーニング学) 森井秀樹

今までに何冊の本を読んだであろうか。年齢を重ねるとともに、読む本の数も少なくなっている。読むジャンルも専門分野に限定され、狭い領域での思考を繰り返している。若い頃は、何に対しても興味があり、「専門バカ」と称されるのが嫌で、いろいろな分野の本を読み、知的欲求を満たしていたように思う。しかし今では、ほぼ専門書、実用書が中心となり、得た知識や情報は研究や授業の中でエビデンスとして紹介し、また自身の研究に活用している。

私には、本を読む際いくつかのルールが存在する。まずは積読（ルール1）、読み始めるタイミングを待っている。自宅の書斎の目につく場所に、常に10冊程度の新書、実用書が山積みされている。自分の中で「今だ!」と思った瞬間に一気に読み上げる。1冊の本に時間をかけると興味が半減してしまうので、できる限り時間をかけないで読み終えるようにしている。2つ目は線読（ルール2）、重要な箇所にはラインを入れる。この行為は、私が本を古本屋に出せない理由でもある。幼い頃からの習慣で、読書の際には鉛筆を持つ習慣がある。しかしラインを引く箇所については、注意をしないと本がラインだらけになってしまう。基本は、知らないことにラインを引く。そして3つ目は複読（ルール3）で、興味のあるテーマに関して著者の異なる本を複数冊（10冊程度）読むことである。重要なことはどの本にも記載されているため、何が分かっている、何が分かかっていないのかが理解できる。冊数を重ねるとつれラインを引く箇所がなくなっていくのが複読の特徴である。そして最後は、書読（ルール4）である。ラインを引いた箇所のうち、授業や研究等でエビデンスとして利用したい部分を書き出す。これら4つのルールが、私の本の読み方である。凡人にはルールが必要である。人間の記憶ほ

ど、不確かなものはない。繰り返し脳へ擦り込むように重要な箇所を読み返すことで長期の記憶が成立する。しかし、それでも忘れる。加齢が原因かもしれない。

最近になって、携帯端末での読書にチャレンジしている。マーカーも引けるし、メモもとれる、値段も安い。時代はペーパーレスである。確かに本棚のスペースは限られているので、書籍等の電子化は時代の流れであろう。壮年期から老年期へ向かおうとする今、そろそろ本の読み方を考える時期に来ているように思う。独自のルールなど気にせず、紙媒体の小さな文字を眼を細めて読んでいるより、指1本で頁をめくり、指2本で文字を拡大できるのは便利である。欲しい本もネットで即購入でき、携帯端末ですぐに読み始められる。遅ればせながら、最近また読書が楽しくなってきた。

ひとそれぞれに本の読み方があると思う。またスポーツと同様、量をこなさないといけな時期がある。興味のあるテーマについて読んで、考えることが重要である。その繰り返しが知識のみならず、自分自身の生き方にも影響を与えることすらある。情報が氾濫し、何が正しくて、何が間違っているかを正確に判断するには、ネット上の片寄った意見を鵜呑みにするのではなく、その出所である本を何冊か読んでみる必要がある。学生時代は、正に量をこなす時期である。専門書だけでなく、視野を広げるためにも色々な分野の本を読んでみよう。必ずや専門分野にもよい影響を与えるに違いない。携帯端末を自由に使いこなせる学生諸君にこそ、読書を習慣化することは簡単なことである。さあ、知的欲求を満たすための読書を始めよう。

(もりい ひでき)

*****「尾籠な話で…」*****

臨床心理学部・教授（ナルシシズム、AIやLGBTQの心理学） 高石浩一

一時期、「本屋や図書館に行くとトイレに行きたくなる」という噂がマスコミやネットで飛び交ったことがある。これは最初の提唱者の個人名をもとに命名され、Wikiには詳細な記述が見られるが、そのメカニズムや真偽のほどはまだまだ不明であり、時おり思い出したように議論が噴出することがある。私自身はしょっちゅう本屋や図書館に行くが、あまりそうした体験がないので、今一つ興味は持てないでいる。でも卒論で、やりたいテーマがない人は、こういう話題に取り組んでみるのも面白いかも知れない。何しろ先行研究は豊富だし、うまくいけばマスコミやネットで取り上げられ、改めて時の人になって、「ホンマでっか!?TV」に出られるかもしれない。

それにしても大人も子どもも、「うんち」は大好きである。お笑い芸人のお漏らしネタは鉄板だし、話題の『うんこ漢字ドリル』は累計売上300万部を超えていると聞く。臨床心理学の領域でいうと、「うんち」「排泄」にまつわる夢は、夢分析では必ずと言ってよいほど登場する。「お金が儲かる」だの「ウン（運）がつく」だの、ワンコインレベルの巷の夢占いの解釈はさておき、「恥」や「切迫感」などと関連する状況で現れやすいので、卒論のテーマ設定に困っている学生は、ぜひ調べてみてほしい。

そういえば昔、本学の教員に酒木保*という先生がいて、「うんちをするように、定期的に論文を書いていないと体調が悪くなる」と言っていた。そんな大量に出さなくても…と思うくらい多作な（多便な?!）先生だったが、知的にも身体的にも、たくさん食べる(学ぶ)人はたくさん(論文も)出す人なので、要するに彼は非常に勉強家だったということなのだろう…。ちなみに「痩せ

の大食い」の人は、食べても食べても太らないので羨ましがられることが多いが、私自身は「高カロリーのお肉を排出する、コスパの悪い人」と思っている。もちろん「痩せの大食い」学者は、尊敬できる人であることに間違いはない。

こういったうんちの話などをする時には、「尾籠（びろう）な話で恐縮ですが…」と付け加えるのが、ちょっとしゃれたエッセイなどを書くときのお作法なのだが、この「尾籠」っていったい何だろう…と思って調べてみたら、もともと愚かなさま、ばかげていることを示す「オコ」の音に「尾籠」の字を当てたものらしい。そして「おこがましい」などと同じ語源だという。「おこがましい」の方は、近世になって「身の程知らず」「差し出がましい」という意味になったが、尾籠の方は「びろう」と音読みになって相変わらず「バカな」、「下品な」という意味のままである。漢字から、何となく犬と散歩する時に持ち歩くビニール袋が昔は籠だったのかな…などと勝手に連想していたのだが、何だ、単なる当て字じゃん…でもこういうのが楽しい。ちょっとだけ新しいことを知って、ちょっとだけハナタカさんになる。毒にも薬にもならないミニ知識…こういうのをうんちならぬ「蘊蓄（うんちく）」**という。オソマツ!!

*酒木保先生は本学臨床心理学科教授を経て、現在宇部フロンティア大学人間社会学部福祉心理学科教授

**ちなみに広辞苑には「蘊蓄」とは知識を深く積み貯えてあることとある。やはり図書館とうんち君は無関係ではない!?

(たかいし こういち)

私のすすめる3冊(私の推薦図書)

食物栄養学科・准教授(食品科学・食品微生物学) 小西 康 仁

◎ 『きのこをまいにち食べて健康になる』

江口文陽 著／キクロス出版 2018

「菌食」という言葉をご存知でしょうか? 「菌食」とは、カビや酵母、細菌などを用いて作る味噌や納豆、チーズなどの発酵食品やきのこを食べることをいいます。最近の研究によると、きのこには免疫力の向上や、生活習慣病予防に効果があるといわれています。本書では、きのこの研究成果だけでなく、生態から調理法まで、様々なことを知る事ができる導入となる1冊です。

◎ 『きのこミュージアム 森と菌との関係から文化史・食毒まで』

根田仁 著／八坂書房 2014

先ほどの書籍は食用きのこを中心に紹介した内容ですが、きのこは食べるだけではありません。ふと足元を見ると、木の根元や草むらに多種多様な色や形をしたきのこがみられます。一方で、ピーターラビットの世界にも描かれたりしています。本書では、日本や世界のきのこにまつわるエピソードを写真や図を用いて詳しく解説した内容になっています。ぜひ読んでみて、マニアックなきのこの世界にのめりこんでもらいたい1冊です。

◎ 『無脊椎水族館』

宮田珠己 著／本の雑誌社 2018

勉強や仕事に疲れた時…、皆さんはどのように気分転換を図りますか。本書では、ジンベイザメやイルカ、ペンギンといった水族館の人気者たちより、全国各地にある水族館で、人知れず不思議な形で漂うクラゲや、色とりどりのウミウシなどの無脊椎動物の魅力を紹介したエッセイです。水族館に行くとなぜかほっとする理由が分かったような気がする1冊です。そしてこの本を読んだ後は、小さな水槽でも1つ1つをきっと眺めてしまうに違いない。

(こにし やすひと)